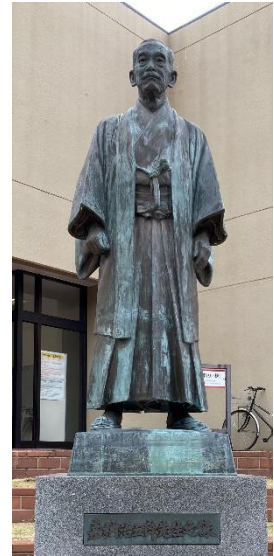


## 開催されなかった東京オリンピック

みなさん、夏休みいかがお過ごしですか。

今回の「校長室より」は、タイトルだけみると、何のこっちゃ？と思うかもしれませんが。コロナ禍の中ではありましたが、TOKYO 2020のオリンピックは始まりました。ここでは、1940年に開催が予定されていたにもかかわらず、日本が開催を取り下げてまぼろしとなった東京オリンピックについて書きたいと思います。

NHKの大河ドラマ「いだてん」をみていた人は、<sup>かのうじごろう</sup>嘉納治五郎さんをはじめとした人々が、東京オリンピックの招致のために尽力し、1936年に招致が決定したことをご存じだと思います。右にある写真は私の母校にある嘉納さんの銅像です。この人は柔道を競技スポーツとして確立した人でもあるのですが、その後日本のスポーツ全体の振興に大きな足跡を残しました。東京オリンピック招致が決定した1936年には、ドイツのベルリンでオリンピックが開催されました。アドルフ・ヒトラー率いるナチス政権下のドイツは、このオリンピックを国威の発揚や宣伝のために最大限利用したとされています。このオリンピックの記録映画である「民族の祭典」、「美の祭典」（監督はレニ・リーフェンシュタール）は、オリンピックという舞台上で躍動するアスリートたちを生き生きと描くとともに、成長するナチスドイツを浮かび上がらせる映画でした。



ご存じのように、その後ドイツは1937年に日本及びイタリアと防共協定を結び、オーストリアやチェコを占領したのち、1939年に独ソ不可侵条約を締結してポーランドに侵攻、ついに第2次世界大戦に突入します。一方、日本国内でも、1937年の<sup>ろこうきょう</sup>盧溝橋事件以降の中国大陆での戦線拡大と、北方のソ連、南方のイギリス、フランス、アメリカ等との緊張の高まりの中で、東京でオリンピックを開催することの是非について議論が始まり、主として開催のための費用負担の課題から、1938年に開催を返上することになりました。開催されれば、アジアで初めてのオリンピックだった1940年の東京オリンピックは、まぼろしとなったのです。招致に尽力した人たちの無念の思いは、察するに余りあります。

だからこそ、1964年の東京オリンピックは国をあげて大いに盛り上がりました。この文章を書いている今日7月22日はTOKYO 2020の開会式の前日ですが、テレビでは、1964年の東京オリンピック関連の映像が盛んに流されています。聖火リレーを沿道で眺める鈴なりの人々、国立競技場で応援する「いだてん」の主人公で、日本最初のオリンピック選手である<sup>かなくりしそ</sup>金栗四三や、入場行進の「オリンピック・マーチ」を作曲し、NHKの朝のテレビ小説「エール」のモデルとなった<sup>こせきゆうじ</sup>古関裕而などの実物が登場していました。

さて、まぼろしのオリンピックといえ、このことにも触れないわけにはいきません。1980年のモスクワオリンピックのボイコット事件です。1979年、ソ連はアフガニスタンへの軍事侵攻を開始しました。このことに反発したアメリカ、日本、韓国など約50か国がモスク

ワオリンピックへの参加をボイコットし、開会式の入場行進に参加しない国なども現れました。現在日本オリンピック委員会（JOC）の会長を務める山下泰裕さんらアスリートたちは、参加を強く政府に訴えましたが、かないませんでした。

オリンピックの開催には、多額の費用とそれに伴う莫大な利権がついてまわります。それゆえに様々な政治的な要素が絡んでくることは仕方がないのかもしれませんが、それはそれとして、やはり何かを考えるときの基準が欲しいですね。そう、「アスリート・ファースト」という視点です。今回 TOKYO 2020 を実施するか中止するかについて、さまざま議論が国会やマスメディアで戦わされたときに、アスリートの人たちはあまり発言していませんでした。あるアスリートは、あくまで場所を用意してもらおう立場だから、発言は控えたいと言っていました。簡単なことではないのでしょうか。

ともあれ、しばらくはオリンピックそしてパラリンピックのアスリートたちの活躍にテレビで声援をおくり、その勝負の厳しさや国境を越えた友情などをしっかりと味わうことにしましょう。